

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平9-140306

(43)公開日 平成9年(1997)6月3日

(51)Int.Cl.<sup>6</sup>

A 0 1 K 97/06

識別記号

5 0 1

庁内整理番号

F I

A 0 1 K 97/06

技術表示箇所

5 0 1

審査請求 未請求 請求項の数6 F D (全 6 頁)

(21)出願番号 特願平7-329498

(22)出願日 平成7年(1995)11月24日

(71)出願人 392002000

株式会社ハヤブサ

兵庫県美濃郡吉川町渡瀬47-3

(72)発明者 大杉 成弘

兵庫県美濃郡吉川町渡瀬47の3 株式会社  
ハヤブサ内

(72)発明者 田尻 隼人

兵庫県美濃郡吉川町渡瀬47の3 株式会社  
ハヤブサ内

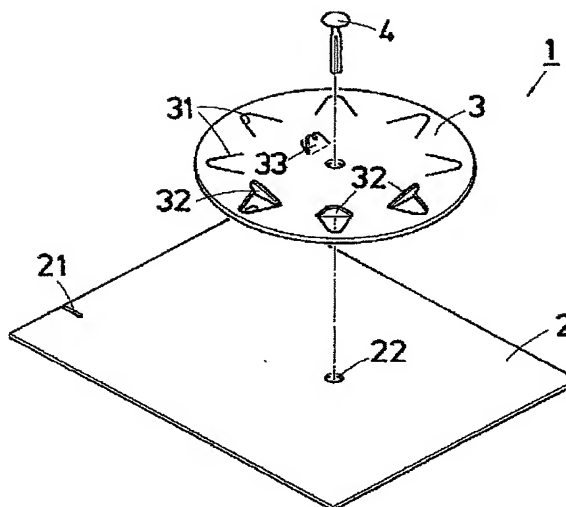
(74)代理人 弁理士 永田 久喜

(54)【発明の名称】 釣り仕掛け係合用台紙

(57)【要約】

【課題】 台紙に係止され包装袋に入っている釣り仕掛けが、その包装袋から取り出すことなく簡単に引き出せ、しかも取り出した仕掛けには糸グセがつかないような、釣り仕掛け係合用台紙を提供する。

【解決手段】 スプール体に釣り糸を巻回し、また針掛け部に釣り針に係止することによって釣り仕掛けに係止するためのものとして、該スプール体を台紙本体に、軸体を介して回動自在に固定する。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 スプール体に釣り糸を巻回し、また針掛け部に釣り針を係止することによって釣り仕掛けを係止するためのものであり、該スプール体は台紙本体に、軸体を介して回動自在に固定されていることを特徴とする釣り仕掛け係合用台紙。

【請求項2】 スプール体は、円板状部材をその円周に沿って複数刻設された切込によって形成された舌片を立ち上げて溝部を形成したものである請求項1記載の釣り仕掛け係合用台紙。

【請求項3】 スプール体は、円板状部材に別体の溝形成部材を取り付けたものである請求項1記載の釣り仕掛け係合用台紙。

【請求項4】 別体の針掛け部が、回動自在に設けられたものである請求項1、2または3記載の釣り仕掛け係合用台紙。

【請求項5】 針掛け部は、スプール体に固着された発泡プラスチックである請求項1、2、3または4記載の釣り仕掛け係合用台紙。

【請求項6】 針掛け部は、スプール体に取り付けられた溝形成部材の外縁に設けられた切り込みである請求項3記載の釣り仕掛け係合用台紙。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、包装袋に入った仕掛けを袋から台紙を取り出すことなく簡単に引き出せ、しかも仕掛けには糸グセがつかない釣り仕掛け係合台紙の構造に関するものである。

## 【0002】

【従来の技術】釣りをするためには、本来は対象魚の種類や大きさに適した釣り針や釣り糸（ミキスやハリス）、及びサルカンその他の付属品を予め入手しておき、これらを結束し組み合わせていわゆる「釣り仕掛け」を作成する必要がある。この作成作業は、釣り場において行なうことも不可能ではないが、長時間竿を出していても実際に魚が釣れる時間は案外短いことも多いので、釣行前に何セットかを作成しておき、根がかりその他のトラブル発生時に迅速に交換できるようにしておくのが釣果を上げるための心得となっている。しかし、現実には単にハリスを釣り針に巻いて固定するだけの作業でもなかなか煩雑であり、特に初心者にとってはどのような釣り針を選べば良いのか、選んだ釣り針にはどの程度の太さのハリスが適しているのか、といった点も含め困難な作業となっている。

【0003】そうした背景から、予め「釣り仕掛け」を製造し、釣り人がそれを購入して竿に取り付けるだけで直ちに釣りを楽しむことができるようにしたものが、古くより製造され、市販されている。釣り糸だけの場合は糸巻きに巻いて販売されており、釣り針だけの場合は袋に多数入れておいて販売されているが、これらを仕掛け

として組み合わせたもの場合には、非常に絡まりやすくなるので、通常は矩形状の台紙の1短辺近傍に釣り針を並列させて係止し、釣り糸（ハリス）を反対側の短辺側に張り、続く釣り糸（ミキス）を該反対側端部に設けられたいくつかの切り込み部に係止するという係合方法が採られた製品となっている。

## 【0004】

【発明が解決しようとする課題】ところが、このような従来の台紙に係合された仕掛けの場合、釣り糸（ミキス）がハリスとの結束箇所で折曲していわゆる糸グセを起こしてしまい、絡みやすく扱いにくいものとなっていた。

【0005】この糸グセは、ミキスの場合には竿側の道糸と直結されており下端位置に錘が付けられ、下オモリタイプの仕掛けの如く重量の大きい錘を伴って投入されるといった状況であれば1、2度の投入で糸グセがある程度は解消されるものではある。しかしハリスに限ってはそうした糸グセを積極的に解消させる機能は全くないので、ハリス自体を折曲させるというような台紙の構造は避けるべきである。そこで実際は、ハリスの長い仕掛けになると、それに従って仕掛けに係合する台紙の長さはどうしても長くなってしまい（30cmを越える場合もある）、携帯に不便で、取扱いも面倒なものが多かった。

【0006】また、例えばクロダイ（チヌ）仕掛けは一般に、1本の釣り針にハリスを結着したものが個包装され、製品として市販されている。この場合には、全体がハリスであるため折曲して強い糸グセがつかないように単にハリスを巻いただけで係合台紙を有していない形態となっていることが多い。この場合には、釣り場において釣り仕掛けを包装袋から取り出した時に絡みやすく、使い勝手は悪い。

## 【0007】

【課題を解決するための手段】そこで本発明者は、上記諸点に鑑み鋭意研究の結果遂に本発明を成したものでありその特徴とするところは、スプール体に釣り糸を巻回し、また針掛け部に釣り針を係止することによって釣り仕掛けを係止するためのものであり、該スプール体は台紙本体に、軸体を介して回動自在に固定されている点にある。

【0008】ここで「台紙本体」とは、スプール体を固定するための板状部材であり、通常紙又はプラスチックで形成される。台紙本体の大きさは、該スプール体に巻かれた仕掛けを取り出す際に該スプール体が回転した時、スプール体の回転を阻害しないような大きさ、形状であれば良い。但し、台紙本体にスプール体を保護するという要求がある場合には、台紙本体の広さ内にスプール体が収まり、そこから突出する部分はない大きさ形状とする必要がある。また釣り仕掛けは、基本的にスプール体に巻かれているわけであるが、仕掛けの端部（通常

は道糸との連結部分)を該台紙本体に係止するようにし、そのための切り込みを設けておくのが普通である。

【0009】「スプール体」は、仕掛けを周状に巻くための部材である。その構造は特に限定するものではないが、商品としてのコンパクトさという観点からして、スプール体の厚みはできるだけ小さいものが好ましい。本発明者が試作した範囲では、全体形状を円板状としその円周に沿って舌片形成用切込を複数設けておき、これを立ち上げて溝部を形成したもの、或いは円板状部材にこれとは別体の溝形成部材を取り付けたもの、等が好適であった。なお、これら「溝部」或いは「溝形成部材」にある「溝」は、スプール体に糸を巻くことができ、しかも巻いた糸が容易には外れないことを基本に、できるだけ折曲部分が発生しないようにしたものであり、連続した凹部に構成される一般的な溝のみを指す語句ではない。例えば円板の円周に沿って90°ずつずらした4か所に突起を設けた場合、これら4か所に順に渡しかけながら釣り糸を巻くと、巻かれた釣り糸は全体として正方形となる。この時該突起が遠心方向に傾斜していたり、突起先端が遠心方向に張り出た形状であったりしていれば、糸が外れにくくなるので、該正方形のゾーンは通常の糸巻きにある「溝」に該当すると言える。本発明においては、こうしたゾーンをも「溝」の概念に含むものとする。但し、今例示した溝の場合に限って言うと、釣り糸の折曲は従来に比してはその度合いが小さいものの、充分ではないとも言えるので、できれば6か所以上とする、或いは、個々の突起の形状を幅広とするなどして折曲の度合いをできるだけ小さくするようにするのが好ましい。勿論、溝の形成方法の最も代表的なものは、円周全体にわたって連続して溝を構成する糸巻きの如きものであって、本発明の概念にもそれは含まれている。従って、上記「6か所」「幅広の突起」といった語句が本発明の権利を限定するものではない。

【0010】ところで本発明は、釣り仕掛けに係止するための台紙の構造に関するものであって、巻かれる釣り仕掛け自体については何ら限定するものではない。逆に言うと、本発明の台紙に係止可能な仕掛けの全てが使用対象となり、多数のハリス（特にエダスとも呼ばれる）のあるサビキ仕掛けのようなもの、1本のハリスと1本の釣り針とのみからなるチヌ釣り仕掛けのようなもの、等に適用できる。

【0011】「軸体」は、スプール体を台紙本体に回動自在に固定するための部材であり、スプール体はこの軸体を中心に回動することになる。構造は、頭を広くとったおねじとめねじの組み合わせ、頭を広くとった割りピンの如きもの、ハトメ金具を利用したもの、等どのような形態であっても良いが、スプール体の取り外しが容易になるようにすれば、台紙を再利用する場合（例えば使用済の仕掛けを巻き取る場合）にスプール体のみを取り外せば手で巻き取る時の作業性が良くなる。

【0012】仕掛けによっては、釣り糸が枝分かかれし釣り針が複数本あるというものがあるが、そのような場合に釣り針に係止するための手段は、構造上台紙本体上に直接は存在し得ない。通常は、スプール体上に係止部を設けそこに係止する。この釣り針に係止する部分の構造についても、特に限定するものではないが、スプール体の一部に切欠を設けるもの、軸体によって固定された円板状のものに釣り針に係止するタイプのもの、スプール体に発泡ポリスチレン、発泡ポリウレタン等を固着してここに釣り針を刺すタイプのもの、等がこれに該当する。また、スプール体が円板状部材と溝形成部材との組み合わせの場合には、溝形成部材の外径を大きく（出来れば円板状部材の外径に近い大きさとし、その外縁に釣り針に係止させるようにしても良い。なお、釣り仕掛けが、釣り針を1本しか有しておらずしかも釣り糸にハリス箇所のないものの場合には、釣り糸（ハリス）を巻く溝よりも回転中心側に釣り針に係止するようにしても支障ない。

【0013】

【発明の実施の形態】以下図面に示す実施の形態に基づき本発明を説明する。

【0014】図1は、本発明に係る釣り仕掛け係合用台紙1（以下本発明台紙1という）の一例として、1本針仕掛け用の台紙の構造を示したものであり、図より明らかなように本発明台紙1は、台紙本体2、スプール体3、割りピン4とにより構成されている。台紙本体2には釣り仕掛け（図示せず）の上端に係止するための切込21、割りピン4を挿通させるための孔22が設けられている。なお、図示はしていないが本発明台紙1は、釣り仕掛けに係合した状態でプラスチック袋に包装されて製品となる。なお、図示はしないが割りピン4の代わりに、着脱が容易な軸体を採用し、スプール体3を台紙本体2から簡単に取り外せるようにしておくと、使用後の釣り仕掛けを再度本発明台紙1に係合する際の巻回作業は容易になる。

【0015】スプール体3は円板状でありその円周に沿う形で多数（図では8個）の切込31が設けられ、且つ該切込31によって形成される舌片32が鋭角を以て立ち上がっている。なお製品段階では全ての舌片32は立ち上げられ、それらによって形成される溝に釣り仕掛けのハリスやミキス等が巻回されることになるが、図では切込31の形状をより明らかにするという意味で、一部は立ち上げていない。またスプール体の内側部分には、釣り針に係止するための針掛け部33が切り込みによって設けられている。

【0016】図2は、図1で示した本発明台紙1に釣り仕掛けHに係合した状態を示すものであり、釣り仕掛けHは、針掛け部33に釣り針Fに係止した後、ハリスLを舌片32に掛けながら巻きつけてゆき、ハリスLの上端を台紙本体2の切込み21に差し込む、という順序で

係合されている。なお、本例の釣り仕掛けHの上端にはサルカンSが結着されているが、これを有していなくとも良い。またセットされた釣り仕掛けHを取り出す場合は、包装袋Bを開封しハリスL上端を台紙本体2の切込21から外し、引っ張り出すだけで、スプール体3が台紙本体2の上を回転しハリスLが引き出されてくることになる。そして最後に、釣り針Fが針掛け部33から外れる。

【0017】次に示す図3及び図4は、針掛け部33についてのそれぞれ別の実施の形態を示したものである。釣り針が1本の場合には、針掛け部33の構造が問題となる場合はほとんどないのであるが、ミクスとハリス（エダス）を有し、各ハリスに釣り針が結着されているという構造の仕掛け（これは市販されている製品において、種類、数量とも圧倒している）では問題がある。即ち、第一に多くの釣り針を係止するためにはそれだけ係止のための広いスペースが必要となるし、仕掛けを取り出す場合針1本のものと異なり最後の針が外れる時以外は溝にはまだ釣り糸が巻かれているために、外れた直後の釣り針が糸に掛かるということも容易に想像できる。また、最初の釣り針を外した時に残りの釣り針を外してしまうわけにはゆかないし、引き出す釣り糸がハリスとハリスの2本になるので釣り針の係止位置に留意しなければ、ハリスとハリスがスプール体3の回転軸を挟んで別れてしまった場合にはそれぞれの糸がスプール体を反対方向に回そうとするため引き出しが困難になるからである。

【0018】そこで図3の例においてはスプール体3の中央部に、発泡プラスチック板5を固定した。この発泡プラスチック板5は、そのどの位置においても釣り針の針先を差し込み係止することが可能であるが、係止した釣り針の取り外しに関してはどの方向から引っ張っても、プラスチック組織が簡単に破壊され苦もなく外れるといった材質のものを採用したやや厚みのあるものである。厚みがあるため、外れた釣り針はスプール体3に巻かれた釣り糸とに距離があって、引っ掛かることがなく取扱いには非常に楽になる。

【0019】図4(a)(b)は他の例であり、スプール体3が円板状部材35と溝形成部材36との組み合わせ構造となっている。溝形成部材36の外径を大きくし（図では円板状部材35と同じ）、その外縁にいくつかの切込37を入れておき、ここに釣り針を係止するようにすれば、ハリスが巻かれる箇所よりも外側に釣り針が位置することになるため、仕掛け取り出しの際に釣り針とハリスが絡まるという可能性は小さなものとなるというものである。また、溝よりも釣り針が外側にあるので、取り出しの際の仕掛けの絡まりも解消されることになる。

【0020】また、図4の如くスプール体3を円板状部材35と溝形成部材36との組み合わせにするという構

造は、切込31によって溝を形成するものではないため、溝形状を円形に近づけたとしても（図1の例では溝は切込31の個数が8個であるゆえ溝形状は八角形となる）、或いは完全な円形にしたとしてもスプール体自体の強度が低下することはないという効果もある。なお本例の場合これらの部材35、36を共にプラスチック（塩化ビニル）で形成し接着剤によって一体化しているが、他のプラスチック、紙、その他としても良い。また、図示はしないがプラスチック一体成形によって、円板状部材35と溝形成部材36とが一つの部材となったものとする、図4のスプール体3の有している効果は損なわず、しかも製造工程数が減少し、寸法精度の維持も容易である、等々の効果もある非常に好適なものとなる。

【0021】ここまで、針掛け部はスプール体3の回転と共動するものとして図示してきたが、完全に一体のものとしてスプール体3に固定されている必要はない。図5はそうした針掛け部構造の一例を示すものであり、スプール体3と同じ回転軸位置にて回転する径の小さな針掛け円板6を示すものである。この円板は、摩擦力によってスプール体3の回転と共動するが、針掛け円板6に係止された釣り針からのハリスに張力が発生したら、共動せず該張力に従う形で回転する。従って、仕掛け取り出し時に釣り針の位置が悪くて仕掛けを取り出しにくいといった場合には、この針掛け円板6をわずかに回転させ、張力によって緊張したハリスを釣り針を外すに充分なまでたるませることが容易になる。

【0022】

【発明の効果】以上詳細に説明したように、本発明に係る釣り仕掛け係合用台紙は、スプール体に釣り糸を巻回し、また針掛け部に釣り針を係止することによって釣り仕掛けを係止するためのものであり、該スプール体は台紙本体に、軸体を介して回転自在に固定されていることを特徴とするものであり、以下述べる如き種々の効果を有する極めて高度な発明である。

【0023】① スプール体が台紙本体に対して可回転であり、釣り仕掛けはこのスプール体に巻かれたものである、全てが包装用袋に入った状態のままで、仕掛けを引き出すことができる。

② 釣り糸を強く折曲させることがないので、糸グセがつかない。

③ 釣り針を複数本具備するタイプの釣り仕掛けの係合にも適用できる。

④ 釣り仕掛けを円周方向に巻くものである、長い台紙とする必要がなく、コンパクトな大きさにできる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に係る釣り仕掛け係合用台紙の一例を示す分解斜視図である。

【図2】本発明に係る釣り仕掛け係合用台紙の使用状態を示す平面図である。

【図3】スプール体についての他の実施の形態の一例を示す斜視図である。

【図4】スプール体についての更に他の実施の形態の例を示すものであり、(a)は端面図、(b)は平面図である。

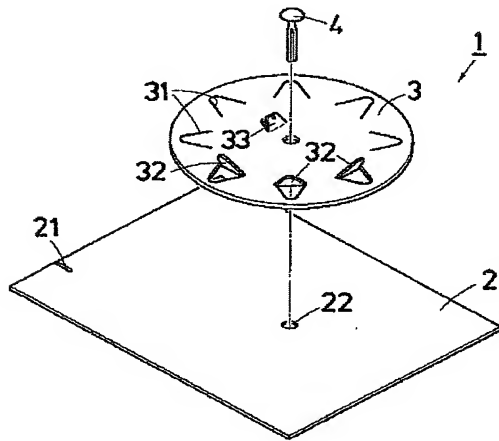
【図5】針掛け部についての他の実施の形態の一例を示す平面図である。

【符号の説明】

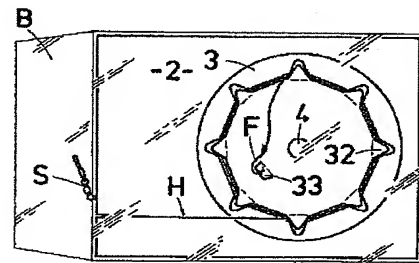
- 1 本発明に係る釣り仕掛け係合用台紙  
2 台紙本体  
21 切込  
22 孔  
3 スプール体  
31 切込

- \* 32 舌片  
33 針掛け部  
34  
35 円板状部材  
36 溝形成部材  
37 切込  
4 割りピン  
5 発泡プラスチック板  
6 針掛け円板  
10 H 釣り仕掛け  
F 釣り針  
L ハリス  
S サルカン  
\* B 包装袋

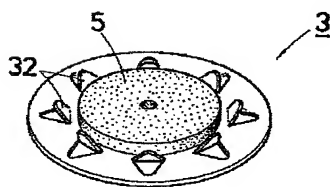
【図1】



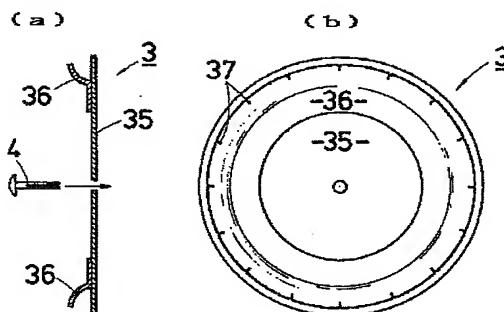
【図2】



【図3】



【図4】



(6)

特開平9-140306

【図5】

